

『キリスト教と天皇（制）』 ーメシアニック・ユダイズムを手掛かりにー

加 藤 知 子

0. はじめに

1945年に太平洋戦争が終了してから2010年で65年、21世紀の今に至るまで、現在の日本のキリスト教界の一特徴として、反天皇制の言論が目立つことが挙げられる。その中であって、反天皇制とは一線を画す『キリスト教と天皇（制）』（笹井大庸著）は異色であるが、本小論では、この『キリスト教と天皇（制）』を紹介し、その論旨を整理することを目的とする。

第一節では、現在日本のキリスト教界に見られる反天皇制の立場が顕著である例を三つ挙げる。第二節では、『キリスト教と天皇（制）』を紹介する。反天皇制の立場に立つ人々は1945年以前の日本近代史を否定的に見るのが一般的であるが、この歴史観に対して再検討を始めるならば、著者笹井氏の主張をより理解しやすくなるはずである。第二節の後半ではこの点について触れたい。

更に笹井氏は、『キリスト教と天皇（制）』の趣旨に納得するキリスト者は、メシアニック・ユダイズムに触れ、ユダヤ的に聖書を解することに抵抗がない者であると指摘している。そこで第三節では、その理由を『キリスト教と天皇（制）』に示された意見を踏まえつつ本小論筆者なりに整理し、同著の意図を読み込んでみることにする。

1. 現代日本のキリスト教界に見られる反天皇制の立場

現代日本のキリスト教界においては、聖書字句に忠実と言われる福音的な立

場・大胆に聖書を解釈するリベラルな立場、プロテスタント・カトリック、キリスト者らの政治的議論、キリスト教作家による小説などの文芸の場を問わず広く反天皇制の言論が見られる。本節ではその中から例を三つ紹介したい。なお、記載の URL ならびにインターネット上の情報はいずれも、2011 年 1 月 6 日現在のものである。

1. 1 日本キリスト教協議会 (NCCJ) サイトからの例

日本キリスト教協議会 (NCCJ) については『キリスト教と天皇 (制)』第三章でも指摘されているが、合計 33 の正加盟と准加盟のキリスト教会 (教団)・団体によって構成される NCCJ¹⁾ はこれまでに、反天皇制の立場からいくつか声明を出しており、その立ち位置には揺るぎがない。同協議会の声明文は、「NCC 文書アーカイブ」²⁾ で読むことができる。

例えば、2002 年 1 月 7 日付の「日本キリスト教協議会 靖国神社問題委員会 委員長森山恣」名で出された「皇太子妃出産に対する、国会・政府・マスコミの『祝意』の押しつけと過剰報道に対して厳しく抗議する」³⁾ では、雅子皇太子妃出産に対して小泉純一郎首相 (当時) やマスコミが表明した祝意を「狂騒ともいうべき、異常で過剰な天皇及び天皇家への祝意・賛美の宣伝」と形容し、続いて「天皇・皇太子夫妻・皇族はそれほど特別で偉い存在なのか。明治以来の天皇と天皇制国家が、それほどすばらしいものだったのか。近代日本の歴史を知っている者は、むしろその正反対であった」と述べている。

また、2004 年 6 月 7 日付の「日本キリスト教協議会 議長鈴木伶子・総幹事山本俊正」名で出された「『日の丸・君が代』強制反対の立場表明」文⁴⁾ では、「歴史を振り返ると『日の丸』『君が代』は侵略戦争を遂行した日本の天皇制軍国主義を象徴するものでした。日本の人々は天皇の治世が長く続くようにと天皇を賛美する歌『君が代』を歌い、『日の丸』の旗のもとに、近隣諸国を侵略し、隣人たちのいのちを奪いました」とある。

更に、2010年8月15日付でNCCJと韓国基督教教会協議会（NCCK）から出された「韓国強制併合100年日韓NCC共同声明書」⁵⁾では、現在の日本において「新しい天皇制国家が装われつつある」とし、そのことに警戒心を表明し、また、第二次世界大戦については「両国の教会が日本の植民地支配の末期に神社参拝を公に決議し、その結果として侵略戦争に同調した」ことを告白し、神の赦しを願うと述べている。

「日本キリスト教協議会の歩み（1948～99）」⁶⁾によれば、1959年の第12回総会で伊勢神宮国家護持断固反対を決議したり、1960年には靖国神社国家保護に反対する建議案を可決したりなど、同協議会の反天皇制の立場は設立以来一貫しており、その主張には今も変化が見られないと言ってよいであろう。

1.2 日本カトリック正義と平和協議会の例—女性国際戦犯法廷との関わり

反天皇制の立場を取っているキリスト者はカトリック教会の中にもおり、特にその傾向が顕著であると思われるのが、日本カトリック正義と平和協議会である。⁷⁾ 2009年には、埼玉と東京で第35回日本カトリック正義と平和協議会全国大会が計画され、その第4分科会として『憲法20条と靖国神社～解説と現地見学で考える～』が準備された。なお、この分科会のガイド役は『侵略神社—靖国思想を考えるために』・『靖国の闇によろこ—靖国神社・遊就館非公式ガイドブック』などの著作がある日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会委員の辻子実氏である。

また、日本カトリック正義と平和協議会公式サイトからは戦争と女性への暴力日本ネットワーク（バウネット（VAWW-NET）ジャパン）へのリンクが貼られている。同団体⁸⁾は、東京で開催された「日本軍性奴隷制を裁く2000年女性国際戦犯法廷」を主導しているが、この法廷は、昭和天皇には太平洋戦争の戦争責任があるとし、それを裁くために開かれたものである。同法廷では、昭和天皇らに有罪判決を下している。

女性国際戦犯法廷では弁護人ではなく法廷助言者を採用したが、その役割を担った今村嗣夫氏はプロテスタントの日本基督教団社会委員会「靖国・天皇制問題小委員会」にて講演を行っている（2004年9月6日）。この講演は活字化され、『象徴天皇制と人権を考える』として日本キリスト教団出版局より出版されている。同著 p.24 では今村氏は「過去の歴史の上にも、国民の意識の上にも天皇に対する相互の信頼と敬愛は存在しないのであって、[天皇が]『あこがれの中心』ではなく、むしろ『ニクシミの中心』であるという立場に立つなら、・・・天皇の象徴性の根拠は根底からくつがえらざるを得ません」と明言している。カトリック信者が皆反天皇制の立場を取っているわけではないが、反天皇制の言論に共鳴する信者は同様のスタンスにあるプロテスタント信者（こちらも全ての信者が反天皇制というわけではない）と一種の共闘関係にあるようである。

1.3 三浦綾子氏諸著作からの例

プロテスタントのキリスト者である三浦綾子氏の著作には、デビュー作『氷点』から既に、キリスト教信仰の福音を縦糸、反天皇制を横糸として物語が展開されていく傾向が見られるが、特に、平成になって発表された『銃口』には反天皇制の色合いが強い。

『氷点』では主人公辻口陽子らを脇で支える辰子という女性が登場する。彼女にはかつてマルキストの恋人があり、彼との間に一子をもうけている（子供は既に死亡）。辰子は『氷点』『続・氷点』と続いて登場するが、婚姻なしで母親となったにも拘わらず、キリスト教信仰をベースにしているはずの小説の中であっても彼女が罰せられることはなく、終始明るく辻口一家の陰に陽に現れながら、主人公陽子を見守る役割を与えられている。彼女の恋人は昭和動乱期の、国家による徹底した取り締まりのために獄死するのだが、マルキストの彼に対しては辰子のセリフとして賞賛の言葉が添えられる。一方、恋人を獄死さ

せた国家に対して辰子は永らく憎しみを抱いていたのだが、その後ある小説で聖書からの引用を読み、⁹⁾ 自らを憎しみから解放したというストーリーになっている。

『銃口』の時代設定は昭和動乱期である。主人公北森竜太が勤務する小学校での校長が見せる天皇・皇后御真影に対する敬心を小説の中で揶揄する一方で、竜太の許嫁である芳子の自由和気あいあいとした職場が好意的に描写される。芳子が勤務する小学校では奉安殿に敬礼する者はいないのだ。竜太は共産主義者だと疑われ、疑惑は彼が徴兵され中国大陆に送られてからもなかなか消えないのだが、それに怯える竜太を通して読者が読み取るものは、共産主義を取り締まった当時の国家に対する恐怖と怨嗟であろう。

太平洋戦争終了後日本へ帰る途中、朝鮮の地で竜太を救ったのは抗日分子の朝鮮人であり、その後ソ連人の見せた温情もあって彼は上官と共に帰国する。このようにソ連人・朝鮮人を好意的に描きつつ、共産主義弾圧の主体である大日本帝国（その元首は天皇であった）を彼らの対極に置くことにより、『銃口』は当時の日本の国の在り方を徹底して批判する書となっているといえよう。同作品は、昭和天皇大葬の日、上京してきている竜太に妻の芳子が昭和もついに終わったと言うと、竜太が、本当に終わったと言えるのか、いろいろなことが尾を引いている気がする、との心情を吐露するところで終わっている。

三浦綾子氏の作品は日本のキリスト者の間では広く読まれており、彼女の諸著作から意識的・無意識的に反天皇制のメッセージを受け取り、内在化していた者は少なくないだろうと想像される。

2. 笹井大庸著『キリスト教と天皇（制）』

このように反天皇制の言論が多い日本のキリスト教界において、笹井大庸著『キリスト教と天皇（制）』のように天皇擁護の立場から書かれた書籍は珍しい。本節では、同著の概要を紹介しながら、笹井氏の主張をまとめてみたい。

2.1 『キリスト教と天皇（制）』と笹井氏の主張

『キリスト教と天皇（制）』は「第一部 クリスチアンの天皇論」「第二部 公開討論会と天皇論への反論」「第三部 反論への反論」「第四部 爆弾発言」の四部から成っている。笹井氏による天皇擁護は第一部・第三部・第四部で展開されており、第二部は笹井氏に反論する石黒イサク氏との対談と、2001年7月に『クリスチャン新聞』に掲載された木村公一氏からの反論全文が収録されている。

まず、最初に押さえておかなければならない点がある。それは、笹井氏は『キリスト教と天皇（制）』p.235でも明言しているように、天皇は擁護しているけれども神社参拝を認めているわけではないこと、また、例えば明治天皇の御真影を拝むなどのような偶像礼拝的行為を勧めているのでもないこと、更に、p.245にあるように、全体主義や独裁主義を確立するために天皇を擁立するような動きには反対しているという点である。同著によれば、これらの点が理解されないまま笹井氏の著作が読まれているようであるからである。

天皇の存在は日本国体の根幹に関わり、それを葬り去ることは日本の国の成り立ちを根底から覆すことになるという立場を取る笹井氏は、中田重治著『聖書より見たる日本』の「いったい一国の歴史はただ偶然にできたものではない。その民族なり国家を指導してくださる造り主なる神の御指導のもとに生まれ出たものであることを知らねばならぬ。こう見ることが聖書の見方である」という箇所を『キリスト教と天皇（制）』p.86に引用し、天皇制打倒を謳う言論を批判する。『聖書より見たる日本』のこの論に従えば、天皇を巡る日本の成り立ちもキリスト教の神（God）の御手の中にあり、天皇家は何らかの目的をもって存続しているはずである、ということになるからである。

笹井氏は『キリスト教と天皇（制）』p.52で、「天皇の本質が『祭司的な王』である」（すなわち天皇はGodそのものではない）ことを再確認しているが、ではその天皇家が代々祀ってきたのはどのような存在なのかと日本の民に問いつけることにより、日本におけるキリスト教宣教の突破口とすることを提案し

ている。彼が着目するのはイザナミ・イザナギが天神に伺いを立てる『古事記』のエピソードである。¹⁰⁾

日本の神話には多くの神々が登場するが、名前が与えられている場合は、「いわゆる宗教が示すような意味での絶対者、第一原因的な神格を現わすということがな」¹¹⁾ く、彼らは名も知らない神に向かって「究極的にはフトマニにおいて神意を得ようとしている」。¹²⁾ すなわち、名前が与えられている神々の上位に名の知られない神が存在し、前者が後者に「祭祀を捧げているという関係が成り立」¹³⁾ っているのである。ここから、「古代日本人も漠然とではあるが宇宙的な絶対者を信じたようである」¹⁴⁾ ことがわかるというのである。

それならば、今上天皇に至るまで天皇家が代々祀ってきた神もそのような宇宙的絶対者であるかも知れないし、もしそうであるならば、その名の知られていない神は誰なのかということになるが、ここで笹井氏は使徒行伝第 17 章 22-23 節に言及する。同箇所では使徒パウロが、アテネの人々が拝んでいる〈知られない神〉がどのような存在なのかについて説明しようと試みている。ここでパウロは、アテネの人々が名も知らないで拝んでいる神こそが全知全能・万物の創造主である God なのだと彼らに告げることをきっかけとして、イエ

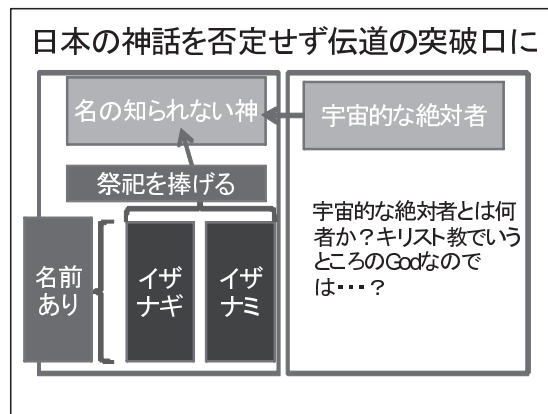


図 1.

ス・キリストの福音へと誘おうとしているのであるが、笹井氏は、これと同じ論法で日本でもキリスト教宣教が展開できるのではないかと主張しているのである。すなわち、皇室に敬意を表し神道の伝統を大切にする日本の民に対して、天皇家が代々祀ってきた神は、実はキリスト教聖書が啓示する God なのではないか、という切り口からイエス・キリストの福音へと彼らを誘おうというわけである。

従って、笹井氏が天皇を擁護する時、昭和動乱期において神社参拝・宮城遥拝をその中に取り込んでしまったと言われるかつての日本キリスト教界の如くになれと述べているわけではない点は押さえておかなければならない。『キリスト教と天皇（制）』第二部では石黒イサク氏が笹井氏に対して反論を試みているが、石黒氏は、あたかも笹井氏が太平洋戦争時における神社参拝強要への回帰を主張しているかの如く述べている¹⁵⁾。しかしながらこれは誤解であって、笹井氏が主張したいのは、天皇を軸として連綿と続いてきた日本という国の有り様を通して、あるいはその器の中にイエス・キリストの福音を注ぎ入れることにより、伝道を試みようということなのである。すなわち、天皇が核となって形作られてきた日本の国柄（国体）を贖いの賜物として用いようというわけである。¹⁶⁾

贖いの賜物を用いる例は、既に他国にて多く見られる。

アメリカではボーン・アゲイン・クリスチャン、すなわち、イエス・キリストの福音により霊的に刷新されたキリスト者たちにまつわる話題で溢れている。彼らの多くは回心の前に既に得意としていた事柄、例えばロックミュージック作曲やダンス、小説執筆や映画製作などをすっかり捨てるのではなく、それらの賜物をイエス・キリストの福音を運ぶ器として用いている。このような彼らが現代アメリカ流贅美様式を形作り、アメリカにおける福音の波を力強いものになっている。

アフリカ諸国では、それまで先祖代々の宗教を信じていた人々がイエス・キリストの福音を受け入れた後でも、以前のワーシップのスタイルを全て捨て去るの

ではなく、例えば体全身で踊りながらイエス・キリストの福音を喜び、神を賛美する場合が少なくないようである。このようにしてアフリカ風賛美様式が整えられ、それはヨーロッパ風の伝統的賛美様式とは異なるものとなっている。¹⁷⁾

キリスト教の長い伝統を持つヨーロッパでさえ、最初からキリスト教信仰と共に歴史があったわけではない。欧州各地の領主やその民たちは歴史のある時点でそれまで信仰していた宗教を捨て、イエス・キリストの福音を告白したのである。しかしながらその際、それまで培われた伝統を全て捨象したわけではないだろう。自分たちの祖先が受け継いできた文化の器を利用して福音を未来へと繋いでいったのが事実であるはずだ。¹⁸⁾

それならば日本でも、例えば、天皇がイエス・キリストの福音を告白した後、これまでの皇室の伝統を保ちつつその伝統を器としてキリストの福音を日本各地に届けたり、日本の民が霊的回心後、自分たちの祖先がこれまで築き上げてきた伝統という箱を全て葬り去るのではなく、その中にキリスト教信仰を注ぎ入れたりなどという情景を描いて見せるのも、まるきりの外れのものであるとは言えないであろう。

もちろんそこには<リスク>も伴うであろう。実際、ヨーロッパ伝統の器にキリストの福音を注ぎ入れた結果、キリスト教母体であるユダヤの伝統とはまるで異なる様相を呈することとなり、そこからユダヤ教徒迫害の根が芽生えてしまったという経緯もある。¹⁹⁾ 従って、日本の伝統の枠組みを利用してキリストの福音を伝え神を賛美するという場合、福音の根幹を失ってしまわないようキリスト者としては注意を払う必要はあるだろう。

2. 2 近代日本に対する歴史認識と日本キリスト教界

『キリスト教と天皇（制）』では、反天皇制の立場を示しているキリスト者、石黒イサク氏と木村公一氏両氏の意見を収録しているが、両氏とも 1945 年までの近代日本史を負の遺産と看做す点で共通している。本小論第一節で言及し

た NCCJ や今村嗣夫氏、三浦綾子氏も同様である。大日本帝国憲法において日本の元首であり陸海軍を統帥すると定められた天皇の下で悲惨な戦争が繰り広げられ、日本内外で甚大な被害が引き起こされた。また、日本や韓国の教会は神社参拝を強いられた。よって、そのような天皇制は悪にまみれたものであり、天皇制とキリスト教が相容れることはありえないというわけである。

三浦綾子氏は自伝的作品『道ありき』の中で、1945 年以前に与えられていた情報とそれ以降アメリカなどから与えられた情報とどちらが正しいのかと苦悶している。三浦氏ほどの作家でさえ、A か B かの二元論的思考に陥ってしまったのは遺憾であるが、選択肢としては、戦前・戦後の情報も両方誤りである、両方正しい、両方とも正しくかつ誤りである、などを挙げるのも可能であるはずだ。実際、太平洋戦争体験者たちが執筆した諸著作を読むと、本当に同じ事件を記したもののなのかと思わされるほど認識に幅がある。あれほど大きな出来事であったのだから、一つの見方から出された情報だけをもって真実であると主張することは歴史を見誤ることにもなりかねないであろう。

戦時中も終戦直後もそれぞれに言論統制に置かれる一方でプロパガンダの波に日本は晒されたことを鑑みれば、太平洋戦争の最中日本人が手にした情報も終戦後に伝えられた情報も正誤入り乱れていたというのが実情ではないであろうか。現代の日本キリスト教界に広く見られる反天皇制の言論は、1945 年以前の近代日本における天皇を独裁者であるかの如く負の存在として捉えることを前提としてなされているようであるが、少なくとも、例えば重光葵著『昭和の動乱』などを読むと、昭和天皇の下トップダウン的に開戦、戦闘そして終戦などという単純な図式で太平洋戦争は描けないことがわかる。同著は 1952 年に中央公論社から刊行されベストセラーとなった書籍である²⁰⁾が、これは、1950 年代の日本では『昭和の動乱』の描く昭和史が広く常識として受け入れられていたことの一つの証しであると言えないであろうか。他方、戦後日本のキリスト教界では負の装いを纏った日本近代歴史・天皇（制）認識が広まるわけ

であるが、かつて GHQ によって出版禁止扱いとなった書籍なども容易に手に入るようになっていく 21 世紀の今日、再度日本近代史を検討し直すことにより、歴史・天皇（制）認識が日本キリスト教界の中で複眼的になされるようになれば、笹井氏の天皇擁護の立場も理解を得られるようになるのではないと思われる。

ただし、太平洋戦争中、日本のキリスト教界が神社参拝を強いられ厳しい統制下に置かれたことは事実である。戦争という異常事態での出来事であったことを考慮しつつも、キリスト教とは関わりのない礼拝行為を強要されたことに深い傷を受けたキリスト者は少なくない。しかしながら、笹井氏も、天皇制の下天皇を礼拝したり神社参拝が強要されたりした場合にはキリスト者は従うべきではないと明言しているし、また、天皇制の枠組みの中でキリスト教伝道が禁止された場合もそれに服するべきではないと断言している。²¹⁾ 現在の象徴天皇制の下では神社参拝は強制されていないし、キリスト教伝道の妨げもないという事実があるからこそ、笹井氏は天皇擁護の立場に立っているのであると言えよう。

3. メシアニック・ユダイズムと『キリスト教と天皇（制）』

『キリスト教と天皇（制）』p.253 では、笹井氏が提示する「天皇問題を理解する人の多くは、どういうわけか、・・・置換神学と契約期分割神学に囚われていないクリスチャンである」と述べられている。本節では、笹井氏と、同著第三部で対談を行っている行澤一人氏の意見を踏まえつつ、またメシアニック・ユダイズムという視点を手掛かりに、『キリスト教と天皇（制）』の意図するところを本小論筆者なりに整理してみたい。

3.1 置換神学に囚われず、ユダヤ的な原点のキリスト教を日本に適用すること

現在メシアニック・ユダヤと呼ばれる人々が増えている。²²⁾ 彼らはユダヤの出自でありながらイエスがメシア（救い主）であるという信仰を持ち、その信仰告白後もユダヤ的伝統を保ちつつ、その中でイエスをメシアとして讃えて

いる。彼らの信仰の在り方はメシアニック・ユダイズムとも呼ばれる。欧米流のキリスト教に慣れている者にとっては奇妙に映るかもしれないが、もともとキリスト教はユダヤ教の一派として成立したものであるから、メシアニック・ユダヤたちはその原点に立つ者たちであるとすれば彼らの立場も理解しやすくなるはずである。イエス自身も弟子たちも皆ユダヤ人であり、彼らが頻繁に引用した聖書（後にキリスト教徒が旧約聖書と呼ぶようになったもの）はユダヤ人が代々受け継いできたものであった。また、イエスの福音や弟子たちの伝道、パウロやペテロらの書簡を集めた新約聖書の著者もほとんどがユダヤ人である（少なくともユダヤ人であると主張されている）。

しかしながら、パレスチナからヨーロッパへとキリスト教の中心が移り、キリスト教会がユダヤ人たちに代わって神の祝福を受けるようになったとする置換神学が主流になると、ユダヤ的思考方がキリスト教徒たちの間から忘れ去られていく。明治期に日本に入ってきたキリスト教は、ユダヤ色の薄い欧米型のものであった。

近年、メシアニック・ユダヤの社会認知度が上がるにつれ、ユダヤ的に聖書を捉え直すキリスト教徒たちも増えてきてはいる。しかしながら、『キリスト教と天皇（制）』pp.208-209 で行澤氏が述べているように、置換神学の流れに留まる日本人キリスト者もあり、彼らは＜ユダヤ的なもの＞に目が向いていない場合も多々あることだろう。²³⁾ 彼らには、欧米という文脈の中で培われてきたキリスト教こそが真正なものであるかの如く映るのかもしれない。もし、かかる欧米流キリスト教を日本にそのまま広めようとするならば、天皇も含んだ日本の伝統を捨象し、日本を欧米の一国としてしまうしか方策がなくなってしまう。

一方、置換神学から脱却しユダヤの文脈で聖書を読み直す試みの中に身を置くキリスト者たちは、欧米型キリスト教が忘れてしまった＜ユダヤ的なもの＞に対する認識を回復しつつある。彼らは、欧米型キリスト教が、もともと＜ユダヤ

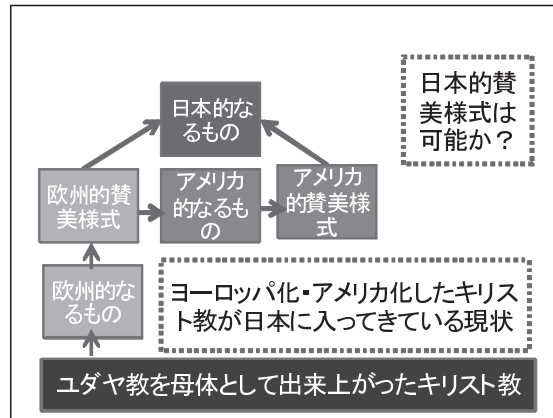


図 2. 欧米を経由して日本へと入るキリスト教

的なるもの>の上に建てられた原点から離れて、欧米という文脈の中で成長したものであるということに気づいている。それならば、日本では「直接イスラエルのオリジナルな信仰を日本に文脈化し、適用」²⁴⁾ することに何ら不可能はないはずだという主張にも納得しやすい。

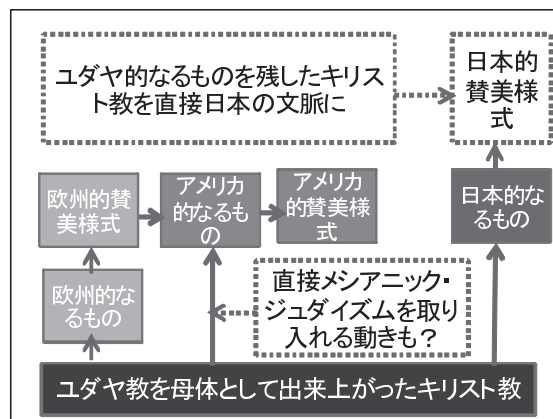


図 3. ユダヤ教を母体として出来あがったキリスト教を直接日本の文脈に移す

また、聖書によれば、終末においてイエス・キリストは一つに纏まった世界王国の王ではなく、イスラエルに王の王（King of kings）として再臨することを笹井氏は指摘している。²⁵⁾ そうすると、終末の時まで各国がその国の有り様を保つ必要があるが、日本の場合はそれは、大王すなわち天皇を核として出来あがってきた国柄（国体）であるはずであろう。このように終末論という点から見ても日本の天皇を否定することは聖書的ではないということになるだろう。

3. 2 <ユダヤ的なもの>と日本の天皇家の間に見られる共通項

日本のキリスト者がメシアニック・ユダイズムを通して<ユダヤ的なもの>に注目し、同時に祭司としての日本の天皇について理解を深めるようになると、両者に共通項が見出されるのがわかる。3. 2では、本小論筆者の試論として両者の共通点をまとめ、『キリスト教と天皇（制）』の意図するところを読み込んでみたい。

第二節で『象徴天皇制と人権を考える』という講義録に触れた。その中で講演者の今村嗣夫氏は、「国民の中で本当に特別な、世襲制の天皇の存在」²⁶⁾について言及している。今村氏はここから天皇制を否定する方向に進むのであるが、メシアニック・ユダヤの見方を通して<ユダヤ的なもの>に接している日本のキリスト者の中には、この箇所からイスラエルの祭司たちを想起する者が少なくないのではないだろうか。アロンの家系である祭司たちもまた、イスラエルの民でありながら特別な存在であり、幕屋や神殿で奉仕する役割を世襲により代々担っていた。²⁷⁾

『キリスト教と天皇（制）』p.52で笹井氏が指摘したように、天皇の本質は「『祭司的な王』であり、他の人々からは神意によって聖別された存在とされている。イスラエルの祭司も同様に、Godの意志により彼らは聖くあるべき者となっていた。しかしながら天皇もアロンの家系である祭司もGodそのものではな

い。このように、聖別された存在ではあるが God ではないイスラエルの祭司の立ち位置が日本の天皇家の存在と似ていることに思い当たれば、礼拝対象そのものではないけれども神聖であるとかつて言われた天皇の在り方に対しても、理解が一段と進むのではないだろうか。ただし、イスラエルの祭司は王になったことはないが、日本の天皇は祭司であってかつ大王であったという点は異なっている。また、笹井氏は、『キリスト教と天皇（制）』p.121 で、国家元首を神聖なる存在として規定している憲法は他国にも存在すると指摘している。²⁸⁾

天皇を礼拝することは、イスラエルの祭司を God であるかの如く礼拝することが叶わないのと同様、キリスト者として避けなければならないであろうし、実際笹井氏も天皇を礼拝することは断固拒否しなければならないと主張している。難しいのは、日本では、敬意を表するためにも礼拝するためにも＜おじぎ＞をするという習慣があり、一見して両者を見分けることは難しいという点であろう。しかしながら、例えば日本では目上の人には敬礼することが多いが、それを以て、その人を礼拝しているなどと言う人はいない。同様に、天皇に対して最敬礼している人々を指して、彼らは天皇を礼拝しているのだなどと断定することはできないばかりか、最敬礼をするのは天皇に対する敬意を最大限に表すためであるとする人がほとんどであるはずだ。

新しい教育基本法や道徳の教科書『心のノート』を以て教育勅語の復活であると言い、かつての教育勅語に対してなされたかの如く偶像礼拝が始まるのではないか、だからキリスト者は新教育基本法に反対しなければならないなどと危惧を抱く人々もいる。しかしながらこれも、もともと教育勅語に敬礼することが礼拝ではなく敬意を表すにすぎなかったのだとするならば、キリスト教信仰と教育勅語との間に問題はなかったことになる。実際、『キリスト教と天皇（制）』pp. 78-81 で笹井氏が紹介している所謂内村鑑三不敬事件以後の展開から判断しても、教育勅語そのものが礼拝対象として認識されたことは日本ではなかったのではないだろうか。

今でもユダヤ教では（そしてメシアニック・ジューたちも）トーラーを聖なる書として恭しく扱うが、これを見て、ユダヤ人たちはトーラーを God の如く礼拝しているのだと思う人々はいないであろう。もし彼らがトーラーを礼拝し始めたとするならばそれは最早ユダヤ教ではなくなる。同じように、仮に教育勅語を礼拝するように要請されたならばそれは明らかに偶像崇拝となるわけであるから、キリスト者としては断固たる態度を取るべきであろう。しかしながら教育勅語は大切なものであるから礼を失することのないように取り扱うといった趣旨でそれに対して敬礼するのであれば、それは偶像崇拝になるのであろうか。

メシアニック・ユダイズム	日本の国の有り様・伝統等
アロンの家系である祭司は神意による	天皇が代々祭司であることは神意による
祭司は聖別される	天皇は神聖である
祭司は God ではない	天皇は God ではない
祭司は礼拝されない	天皇は礼拝されない
聖なる書トーラーを恭しく扱う	教育勅語に礼を以て接する
トーラーは礼拝対象ではない	教育勅語は礼拝対象ではない
同胞ユダヤ人たちの信ずる God はメシアニック・ジューたちの信ずる God と同じであるが、そこで踏みとどまらずイエスをメシアであると積極的に伝道	日本の民が敬意を表する天皇が祀ってきたカミは God であるかもしれないとキリスト者の頭の中に留めておくのではなく、この点をきっかけとしてイエスの福音を積極的に伝道？

表 1. メシアニック・ユダイズムと日本の国の有り様・伝統等との類似点

本小論第二節では、天皇家が代々祀ってきた名の知られない神は実はキリスト教聖書の God なのではないかという問いかけを突破口として日本の民に対するキリスト教宣教を展開しようという笹井氏の主張を紹介した。これは、天皇家が祀っている神と聖書の God とを頭の中で等号で結んでおけば、日本のキリスト者は天皇制をこのままの形で容認してもよいということを言っているのではないだろう。笹井氏は日本でのリバイバルを望んでおり、日本の民が多

くイエスをキリストとして告白して欲しいと願っている。もし天皇陛下自身が、これまで祀ってきた名の知られない神は聖書の God のことだったのだとの公の信仰告白に至るのであれば、例えば祭儀の形態は大枠これまでと同じものとして保ちつつも、内実はキリスト賛美へと一步を踏み出すことができるようになるかもしれない。そのために、日本のキリスト者は環境を整えなければならないというのが笹井氏の主張なのである。

メシアニック・ユダヤや彼らを支援するキリスト者たちは、自分たちの礼拝する God と、（イエスをキリストとして告白していない所謂）ユダヤ教徒たちの信じる God とが同じ存在であると認識している。だからそれで良いのだと踏みとどまるのではなく、ユダヤ教徒たちに対して、彼らが待ち望んでいるメシアとは実はイエス（ヘブライ語でイエシュア）として既に来臨を果たしており、待ち望むべきは彼の再臨であると伝道している。

これと同様に、天皇家が今まで祀ってきた神は実は天地万物を創造した全知全能の God なのではないかという問いかけを、日本キリスト者の頭の中だけで納得しているのではなく、このことを、天皇はもちろん天皇を核として国を作ってきた、未だイエスをキリストとして告白していない日本の民に対しても明確に発信することは可能であるし、それこそが日本における伝道の端緒となるのだと主張することは、あながち無謀なことではないだろう。ここに、ユダヤ的視点から同胞ユダヤ人に対してイエス・キリストの福音を述べ伝えるメシアニック・ユダヤたちの姿と、『キリスト教と天皇（制）』で展開されている、天皇を戴きながら形作られてきた日本という国の体を贖いの賜物として用いていこうとする試みとの間に、本小論筆者は並行的な類似を見出すのである。天皇を擁護する笹井氏が社長を務めるマルコーシュパブリケーションはメシアニック・ユダイズムに関する書籍を多く出版しているが、それも偶然によるものではないだろう。

4. おわりに

日本の天皇がイエスをキリストとして告白するなど想像もつかないと思われるかもしれない。しかしながら、歴代のローマ皇帝も最初から皆キリスト教徒であったわけではない。歴史上のある時点で、それまでくまさか>と思われていた回心が一ローマ皇帝に起こったわけである。ただ、それが何世紀も前のことであるため、現代人の多くにとっては日常のレベルで意識されていないだけである。天皇がイエスをキリストとして告白するのは<今>という時なのではないか、そのためには天皇を廃するのではなく、天皇を核として出来あがってきた日本の国の有り様、その中に福音の突破口を見出そうというのが『キリスト教と天皇（制）』の主張であると言えよう。

注

- 1) 1948年に設立されたプロテスタントの団体。公式サイト URL は <http://ncc-j.org/index.html>。なお、『キリスト教と天皇（制）』では日本キリスト教協議会の他に『キリスト新聞』、『クリスチャン新聞』、日本福音同盟（JEA）社会委員会、元日本キリスト教団総会議長辻宣道氏の意見なども、反天皇制であると指摘されている。
- 2) URL は <http://ncc-j.org/diarypro/archives/>。
- 3) URL は <http://ncc-j.org/diarypro/diary.cgi?no=91&continue=on#continue>。
- 4) URL は <http://ncc-j.org/diarypro/diary.cgi?no=69&continue=on>。
- 5) URL は <http://ncc-j.org/diarypro/archives/320.html>。
- 6) URL は <http://www1.jca.apc.org/ncc-j/nenpyo.html>。
- 7) 公式サイトの URL は http://web.mac.com/jccjp/justice_and_peace/home.html。
- 8) 公式サイトの URL は <http://www1.jca.apc.org/vaww-net-japan/>。
- 9) 引用された聖書の箇所は、ローマの信徒への手紙第 12 章 19 節「自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、『主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と書いてあるからである」である。

- 10) 『キリスト教と天皇（制）』p.36 に引用。
- 11) 同 p.37。
- 12) 同。
- 13) 同。
- 14) 同。
- 15) 『キリスト教と天皇（制）』p.118。
- 16) 『キリスト教と天皇（制）』p.38-39 を始め笹井氏がよく言及する〈贖いの賜物〉は、
ジョン・ドーソン著『神のために都市を奪回せよ』からの引用である。同著はマル
コーシュパブリケーションから邦訳が出版されている。
- 17) 『キリスト教と天皇（制）』p.215 に一例が紹介されている。
- 18) 『キリスト教と天皇（制）』p.208 の行澤氏の発言を参照のこと。
- 19) Brown, Michael (1992) *Our Hands Are Stained with Blood*. [マイケル・ブラウン
『教会が犯したユダヤ人迫害の真実』横山隆監訳、マルコーシュパブリケーション、
1997 年]などを参照。
- 20) 中公文庫 BIBLIO20 世紀版『昭和の動乱下』に添えられた牛村圭による解説（同書
p.375）による。
- 21) 『キリスト教と天皇（制）』p.259。
- 22) メシアニック・ユダイズムについての詳細は、阿部正紀（2004）『メシアニック入門』マ
ルコーシュパブリケーション、Juster, Daniel C. (1995) *Jewish Roots: A Foundation of
Biblical Theology*. [ダニエル・ジャスター『メシアニック・ユダイズム—基礎と視点』
行澤一人監訳、マルコーシュパブリケーション、2004 年]、Shulam, Joseph (2008)
Hidden Treasures. [ヨセフ・シュラム『隠された宝』石井田直二監訳、イーグレイプ、
2009 年]、加藤知子（2010）「メシアニック・ユダイズムに関する覚書」『星城大学人文研
究論叢第 6 号』等を参照のこと。
- 23) また、契約期分割神学の立場を取る者は、今はまだユダヤ人がイエスをキリストと
して告白する時ではないとするので、彼らも〈ユダヤ的なもの〉に目が向いてい

ないと言えるだろう。

24) 『キリスト教と天皇 (制)』 p.209。

25) 同 pp.235-236。

26) 『象徴天皇制と人権を考える』 p.51。

27) 旧約聖書民数記第3章と4章にはレビ人をイスラエルの他の人々と分けて祭司アロンの下で幕屋で仕えさせることが神意であると記されている。同第8章には、レビ人を清めること、また、同第17章では、レビ人の中でアロンの家系が特別であることが神によって示されたと述べられている。

28) なお、かつて天皇に対して用いられたアラヒトガミという呼称であるが、アラヒトというからには<人>であり、神代の神々はアラヒトではなく（言い換えれば人代の天皇は神ではない）、またアラヒトガミのカミは統治者への尊称であるという津田左右吉氏の見解を『キリスト教と天皇 (制)』 p.31 で笹井氏は紹介している。

参考文献

Brown, Michael (1992) *Our Hands Are Stained with Blood*. [マイケル・ブラウン 『教会が犯したユダヤ人迫害の真実』 横山隆監訳、マルコーシュパブリケーション、1997年]

今村嗣夫 (2005) 『象徴天皇制と人権を考える』 日本キリスト教団出版局。

三浦綾子 (1980) 『道ありき—青春篇』 改版版、新潮社文庫 [主婦の友社より 1969年出版]。

三浦綾子 (1982) 『氷点 上』 角川文庫 [朝日新聞社より 1966年出版]。

三浦綾子 (1982) 『氷点 下』 角川文庫 [朝日新聞社より 1966年出版]

三浦綾子 (1982) 『続・氷点 上』 角川文庫 [朝日新聞社より 1971年出版]。

三浦綾子 (1982) 『続・氷点 下』 角川文庫 [朝日新聞社より 1971年出版]。

三浦綾子 (1998) 『銃口 上』 小学館文庫 [小学館より 1994年出版]。

三浦綾子 (1998) 『銃口 下』 小学館文庫 [小学館より 1994年出版]。

日本聖書協会 (1977) 『聖書』 口語訳。

笹井大庸 (2003) 『キリスト教と天皇 (制)』 マルコーシュパブリケーション。

重光葵 (2001) 『昭和の動乱 上』中公文庫 BIBLIO20 世紀 [中央公論社より 1952 年出版]。

重光葵 (2001) 『昭和の動乱 下』中公文庫 BIBLIO20 世紀 [中央公論社より 1952 年出版]。